

Le Jeu d'Adam

An Anglo-Norman Drama of the Twelfth Century

アングロノルマン「アダム劇」訳

福 井 秀 加

—序—

「アダム劇」は現存する唯一の写本 MS. Tours 927 によって伝えられてきたフランス語による最も古い宗教劇の一つである。その本文は12世紀半ばに成立したと推定される。

フランス、イギリスにおいて宗教劇の萌芽は凡そ10世紀ごろ教会の内部から発生した。教会の聖務日課の祭式や祝祭日の礼拝式は元来劇的側面を具えていたのである。これら典礼の重要なものを民衆のためにわかり易くし、民衆を信心に導こうとの目的のために聖職者たちは短い劇にしくみ、彫琢を加えた。祝日、主日のミサ式文のところどころで歌われるラテン語の交誦、進句 *trope* には衣裳や小道具を使用した説明の場面がつけ加えられた。

この試みは教会堂内で聖職者が演じる典礼劇へと発展するのである。古い記録ではウィンチェスター司教 *Aethelwold* の制定した *Concordia Regularis* 「修道士規則」965-75 の中に、劇的な復活祭朝課の一場面の演出が書き残されているという¹⁾。

やがて典礼劇は聖堂から外へ出て、教会の正面入口を背景に前庭 *parvis* の広場で上演されるようになり、劇の言葉も俗語がラテン語にとって代った。拡大してゆく内容に個人的創作がつけ加わり、工夫が凝らされてくると劇は次第に聖務から離れて独立し、変貌してゆく。

「アダム劇」はちょうど教会内の典礼劇が教会を離れ民衆のものとなり、宗教劇 *Mystery Play* として発展してゆく初期の第一歩を示している、準典礼劇の傑作である。準典礼劇と見做すべき所以は、三つの主題即ち、アダムとエヴァ、カインとアベル、予言者たちの証言^{あかし}、という場面を持つこの劇の枠を一応形づくっているのが七旬節主日 *Septuagesima* の典礼、ラテン語による交誦と、降臨節の際の同じくラテン語による応答であるからだ³⁾。礼拝式用の型どおりの *liturgic* なラテン語が朗読されるとその意味を説明し、解釈を行う俗語、フランス語（この場合アングロノルマン語とってよい）による劇が展開する。このドラマツルギーは、しかし、作品が全く初期のものであるに拘わらず見事に統一がと

Le Jeu d'Adam

れており、活気に溢れ、観衆の心に訴えかける魅力ある主役たちを舞台上に登場させるのである。上演に必要なト書がラテン語で書きつけられてある所から察して役者は一部の者を除き修道僧、あるいは修道院附属学校の学僧、生徒であったと考えられている。悪役のサタン及びその手下共という配役は僧侶にとっては喜ばしくない配役なので旅回りの芸人、吟遊詩人等がその役を貰い活躍したであろうという楽しい推測もできる。^④

現存する写本は13世紀後半のものでこれを筆写した写字生は南仏の人間であったろう。^⑤然し随所にアングロノルマン語の特徴が見られ、アングロノルマン韻律の特徴が顕著である。古英語の「創世記」Genesis B^⑥に見られるアダム誘惑の描写と「アダム劇」におけるその場面の類似性が認められることなどによってこの劇が英国に於て成立した可能性も考慮し得るし、また、ノルマンディに於て成立したという見解も多い。^⑦いづれで成立したにせよ、現在一致を見ている諸学者の見解は、まず劇の原典がアングロノルマン語で書かれてあったということ、それはジョン王又はヘンリー3世の治世に Aquitaine 周辺へ極めて容易に伝達されたであろうということ、そしてその写しが Tours の 単一写本となって残ったであろうということである。写本は 229 葉から成り、Wace の *Vie de la Vierge Marie* や *La Vie de sainte Marguerite* も含まれており、「アダム劇」は写本の 20 recto—40 recto に書かれてある。そのうちアダムとエヴァの物語は 20^r より 31^v までである。

作者は僧職にあったのか、教会の教えである十分の一教区税について、収穫の初物を神に捧げる習わしについて言及する。^⑧ 作者はしかし、僧であると同時に劇作家であった。彼は当時の観衆が大いに関心を持ったであろう話題、人びとの生活に浸透した事柄を巧みに把えて、人類の歴史の始まりという峻厳で膨大な背景の中に何の苦もなく移し入れる。E. アウエルバッハの言うリアリズムである。^⑨ 更に彼は登場人物の心理描写に優れた手腕を示し、彼等の性格づくりに非凡な冴をみせているので、この素朴な劇の登場人物はまるで親しみの持てる隣人のように見る者に迫り、語りかけてくる。octosyllabic と decasyllabic をもって流れる詩のリズムに変化をつける対話は、微妙な心理の綾を短い応酬に凝縮させる絶妙の扱いであって、その短い対話と対照的なアダムとエヴァの愁嘆場の長台詞と共に聴く者を舞台に惹きつけたことであろう。翻訳はアダムとエヴァの樂園喪失の物語に限った。Aebischer 版を底本として随時写本を参照している。原文ラテン語の部分は [] を付して示した。

— 訳 —

アダム劇の演出手順

[一段と高い所に天国がしつらえられる。天国の中にいる人物は肩から上だけが見えるよう、その高さに天国の回りをカーテンと絹の布がとり囲む。香りの良い花々や木の葉が

Le Jeu d'Adam

散りばめられる。その場所が大層楽しい所と見えるように果実をつけた種々の樹を置く。やがてダルマチカを身に着けた救世主が現われる。アダムとエヴァは彼の面前に立つ。アダムは赤いチュニック上衣を着け、エヴァはまことに女らしい白い服、白い絹の上服を着けており、二人は神に向かって立つ。アダムは然し神に近く落ち着いた顔付きで立ち、エヴァは少し顔を俯けている。アダムが答えねばならぬ時は速すぎも遅すぎもせず答えられるように充分弁えねばならぬ。彼自身だけでなく全ての人達が落ち着いて話すように、又話題にしている事柄につき当事者にふさわしい身振りをするように教えられていること。リズムを以て話すときは音節を加えたり省略したりせず全ての音節を正確に発音し、言うべき事は次々と順に言う。科白を言うものが誰であれ天国を名指す時は、天国の方をみてそれを手で指し示す。

さて朗誦が始まる：

(朗誦) 最初に神は天と地を創られた

それが終るとコーラスが歌う：応誦

主はかくして造り給うた

歌が終り、神(FIGURA, ^{フィグウラ} 形姿と呼ばれる)が口を開く]：

アダム(Adam)よ！ アダム答えて：主よ！

F. 大地の土から私はお前を創った。

A. よく存じております。

F. お前は私の似姿にした。私の姿を写して土から造ったのだ。以後決して私に背いてはならぬ。

A. 背きはいたしません。貴方様を信じ、私の創り主に服従します。

F. 私はお前によい仲間を与えた。(10)それはエヴァというお前の妻である。妻でありお前と同じものだ。彼女には誠実でなければならない。お前は妻を愛し、妻はお前を愛する、そうすればお前達二人は私の寵愛を受ける。彼女はお前に従い、そして二人は私の思いの儘になるように。汝の脇骨から彼女を造った。お前から生まれたのだから他人ではない。まさしくお前の身体から作り(20)女はお前から出てきた、他からではない。理性によって彼女を支配せよ。お前達の間にいさかいがなく、大いなる愛と豊かな理解があるように。それが結婚の掟である。

[神はエヴァ(Eva)に向かって]：

エヴァよ、さてお前に話そう。言う事をよく聞き、よく覚えておくのだ。私の言う通りにすればお前の心に優しさが宿るであろう。汝の創り主なる私を敬い、(30)私を^{あるじ}主と認めなさい。汝の考え、力、知恵の全てををもって私に仕えることだ。アダムを愛し、いとしみなさい。彼は夫でお前はその妻である。彼には常に従い、彼の言い付けからは、はずれぬように。優しい心で彼に仕え、愛するのだ、それが結婚のつとめであるから。汝

Le Jeu d'Adam

がアダムの良き伴侶となるならば(40)私は汝をアダムと共に榮えしめよう。

E. 主よ、私はそのように致します。貴方様のお気に入りますように、何事も背きは致しません。貴方様を主と認め、アダムを私と同じもの、そして又、より力強きものと認めましょう。アダムには常に忠実であって、良い相談相手となりましょう。全ゆることについてお気に召しますように、主よ、お仕えいたします。

[そこで神はアダムを近くへ呼び寄せねんごろに言う]:

アダム、私の言うことを良く聞くのだ。(50)汝を造ったからにはふさわしいものを汝に与える。私の掟を守ればお前は永遠に生き、病に苦しむことなく、健やかに過ごす。飢えることもなく、渴きのために飲まねばならぬこともない。寒さもなく、暑さも知らぬ。お前は喜びの中にあり、疲れを知らず、楽しみの中にあり、決して悲しみを知らぬ。お前の生命は常に喜びに浴し、とこしえであり、生命に限りはない。私はそのことを汝に告げる、エヴァにもそれを聞かせたい。(60)エヴァが分からねば自ら愚ものということだ。汝は大地の全ての支配権を持つ、鳥類、獸類、其の他諸々の富の。羨む者は無益である、何となれば全世界は汝に従うのだから。汝に善きもの悪しきものをわきまえさせる、そのような才覚を持つ者は自由を享受するのだ。全てを公平に秤にかけよ。私の忠告を信じ、私に忠実であって欲しい。悪を捨てて善に従え。(70)汝の主を愛し、主と共にあれ。たとえどの様な助言を受けても私の忠告をおろそかにするな。若しお前がそれを守れば決して罪を犯しはしない。

A. 貴方様のお恵めぐみに深く感謝します。貴方様は私を創られ、善と悪とを私の権限の中におくという恩恵を授けて下された。私は喜んで貴方に奉仕します。貴方様は私の主であり、私は主に造られしもの。貴方は造り賜い、私は主の被造物です。心を尽してお仕えせぬような(80)よこしまな心には決してなりません。

[そこで神は片手で天国をアダムに示し、次のように言う]:

F. アダムよ。

A. 主よ。

F. 私の考えを聞かせよう。さあ、この園を見よ。

A. 何という所ですか。

F. 天国だ。

A. ほんとうに大変美しい。

F. 私は天国を其処そこに置いた。其処にとどまる者は私の友である。お前は天国にとどまり、それを守るように。

[彼等を天国に送り、言う]:

この中にお前たちを住ませよう。

A. 我々は此処ここに長く住めるのですか。

Le Jeu d'Adam

F. 間違いなく永遠に生きるのだ。決して死ぬことなく、病にも罹らぬ。

[コーラスが歌う：応誦]

そこで神は人を連れて行かれた

それから神は片手を天国に向けて上げ、言う]：

この園の自然のさまを教えよう。(90)此処では如何なる楽しみも欠けることがないのだ。この世で凡て被造物が欲しがらる善きものはそれぞれ此のところで望み通りに与えられる。此の園では女は男の怒りを知らず、男は女にたいして恥も恐怖も覚えさせぬ。男は罪なくして子供をつくり、女は苦しまずして子供を生む。汝は永遠の生命を得、幸福に生きる。お前は決して年をとらぬ。死を恐れることはない、それは汝に危害を加えぬ。(100) 汝は天国から外へ出ずに、此処で暮らすのだ。

[コーラスが歌う：応誦]

主はアダムに語られた

そこで神はアダムに天国の木を示して言う]：

お前は気儘にこの果実の全てを食してよい。

[それから禁じられた樹とその実を示して言う]：

お前にこれは禁じる。どんな楽しみもこれから得てはいけない。若しこの木の実を味わうならば、直ちに死を感じ、私の愛を失う。お前の境遇も悪しきさまに変わるのだ。

A. 私は貴方様の掟を全て守ります。私もエヴァも決して掟に背くことはありません。たった一個の果実でこのような領地が失くなるのであれば、私が外へ風の中へ投げ捨てられるのは当然です。リンゴ一つのために私が貴方様の愛を捨てるのならば、(110) 正気であれ狂気であれ、私は反逆者に対する法により裁かれるべきです。誓いを破り自分のあるじを裏切るんですから。

[そこで神は教会の方へ行き、アダムとエヴァは誠実な心をもって喜びながら天国を逍遥する。その間悪魔たちは舞台の方へ集まってきて様子を窺う悪魔らしい身振りをする。彼等はやがて天国へ近付き、禁じられた木の実をエヴァに指し示し、食べるようにと何やら誘っている。

それから悪魔 (DIABOLUS) はアダムに近寄り、そして言う]：

何をしているのかね、アダム？

A. とても楽しく此処で過ごしています。

D. うまくやっているのかい。

A. 苦しみなど何もありません。

D. もっと良くなれるのだがな。

A. どの様にしてなれるのか分かりませんが。

D. 知りたいかね。

Le Jeu d'Adam

- A. 私がもっと上手くやれるんですって！
D. どんな工合にするのか知っているぞ。
- A. 何の必要がありましょう。
D. 必要でないことはなかりう。
- A. 役に立ちません。
D. いや、役に立つ。
- A. どれ程だか分かりません。
D. (120)性急にお前に言うことはできぬが。
- A. まあ、言って下さい。
D. 言わぬぞ。お前さんが頼み疲れるのを見るまでは。
- A. 私は知らなくとも良いですよ。
D. つまりだな、お前さんはもうそれ以上の善いものを持つ必要はないのだ、お前は最も善いものを持っているのにそれを楽しむすべを知らんのだね。
- A. どうしてですか。
D. 聞きたいか、こっそりと教えてやろう。
- A. 是非そう願いたいです。
D. アダム、まあお聞き、しっかりと聞くのだぞ。(130)お前の得になることだ。
- A. それでは聞きます。
D. 私を信じるかね。
- A. ええ、しっかりと。
D. まったく全てだぞ。
- A. 一つだけは別ですが。
D. どんな事だ。
- A. 言いましょう、私は創り主には背きませんよ。
D. そんなに畏れているのか。
- A. ええ、確かに。私はあのお方を愛し、そしてまた、恐れています。
D. お前は分かっちゃいないね、自分に何ができるのか。
- A. 善いことも悪いこともできます。
D. 悪いことが起るなどと思った日が禍いだ。(140)お前さんは栄光に包まれており死にはしないのだらう。
- A. 神は私に言われました。掟をふみはずした時は死ぬのだと。
D. その大それた違反とはどんなものか、今すぐに聞きたいね。
- A. ええ、すぐに言いますよ。神は私に命じられました。天国にあるあらゆる木の実を食べても良いと、但したった一つだけはいけないと、そう教えて下さいました。その木は

Le Jeu d'Adam

禁じられていますから(150)手を触れぬようにしています。

D. それは一体どの木だ？

[その時アダムは手を差し伸べ、悪魔に禁断の木の実を示して言う]：

A. あの木が見えますか、まさしく神が禁じ給うた木です。

D. 何故なのか知っているのかい。

A. 勿論知りません。

D. その理由を教えてやろう。他の果物は彼にとって何も重要ではない。

[片手で禁じられた果実を示し、そしてアダムに言う]：

あの高い所にぶら下っている果実の他はだ。あれは知恵の木の実だ。全ての知識についての知恵を与える。あれを食べればお前は善いことをするのだよ。

A. (160)私がどんなことを。

D. いずれ分かる。お前の眼は直ちに開け、あるべき事柄は全てお前に明らかとなる。お前のやりたい事は全てできる。木の実を引張って摘みとればお前さんは良いことをするのだよ。お食べ、ためになるから。何も神を恐れなくなるよ。食べてしまえば、お前は神と等しい者だ、だから彼はその木の実を禁じようとするんだ。私を信じるかね？ 果実を食べてごらん。

A. そうはしません。

D. 可笑しなことを聞くものだ、食べんのか？

A. (170)食べない。

D. 何とお前は愚かだな。この言葉をお前はまた思い出さるうよ。

[そこで悪魔は退場し、他の悪魔のところへ行く。舞台を一回りしてしばらく間を置いてから楽しそうに嬉しそうに、アダムを再び誘惑に行く、そして言う]：

D. アダム、何をしている？ 考えを変えるかね、お前さんはまだ馬鹿な考えをしているのか？ さきにお前に言っておこうと思っていたのだが、神の施しを受ける者として、この果実を食べるようにと神はお前を此処へ置かれたんだよ。他の楽しみはあるのかい。

A. ええ、勿論欠けるものは何也没有ありません。

D. (180)もっと高望みをしないのかい？ 神があんたを庭番にしたのだからもっともっと自分の身を大切に楽しくできるだろう！ 神はお前を自分の場所の守り番にしたのだ。お前さんは他の楽しみを求めないのかい？ ただ腹一杯食べさせようとお前を造ったのかい？ もっと別な榮誉は与えられないのか、よくお聞き、アダム、私の言うことを聞くのだよ。私は心底お前に忠告しよう。お前は主などいらなくなる、(190)つまり創り主と同等になるんだ。総てを言って上げよう。あの林檎を食べればだ、

[悪魔は天国の方へ手をあげる]：

Le Jeu d'Adam

汝は尊厳を以て支配し、神と力を分かつことができる。

A. ここから出てゆけ！

D. アダム、何と言ったんだ？

A. この場から立ち去れ、お前はサタンだ。悪い忠告を私に吹き込む。

D. 私がどのようにしてだ？

A. お前は私を神罰の苦しみに落としたいのだな。我が主といさかいをさせ、(200)私を喜びから奪い、苦悩に陥れようとする。お前なんか信じないぞ、悪魔よ去れ！私の眼の前に再び現れるんじゃないぞ！そんなに厚かましくするな！お前は裏切者で真心のない奴だ。

[そこで悪魔は悲しそうに頭を垂れてアダムから離れ、地獄の門の所まで行き、他の悪魔と話をする。それから観衆の中を一めぐりし、やがてエヴァのいるあたりから天国へ近づく。嬉しそうな顔をしてエヴァにおべっかを使い、次のように話しかける]：

エヴァさん、さあ、貴女の所へ来ましたよ。

E. サタンよ、どうしてなの、言って下さらない？

D. 貴女のためになることと貴女の榮譽を求めているんです。

E. 神様がそうして下さいますように！

D. 怖がってはいけませんね。天国に関する全ゆるもくろみを、かなり前から(210)私は聞いて知っていますよ。その一部分を貴女に言って上げようと思って。

E. じゃ始めて下さいまし、聞きますわ。

D. 聞きますか。

E. ええ、聞きましょう。何も貴方を怒らせたくありませんから。

D. 私の話を隠しておけますか。

E. ええ、たしかに。

D. 露見するだろうがなあ。

E. 絶対にそんなことしません。

D. それでは貴女を信頼しよう。それ以上の確証はいらない。

E. あなたの言葉を信じて下さってよろしいのよ。

A. (220)貴女は育ちが良いね。アダムに逢ったがあれは全く馬鹿だよ。

E. 少し堅物なのです。

D. いずれ柔くなるさ。今のところ地獄^⑩より固い。

E. 彼は高貴なのですわ。

D. それどころか奴隷だ。自分のことを気遣おうとしない。少くともせめて貴女は考えななさいよ。貴女は弱くて優しいものなのだ。薔薇よりも瑞々しく、水晶よりも白く、(230)谷間の氷上に降る雪よりも白い。創り主は悪い夫婦^{カップル}を造ったものだ。あんたはと

Le Jeu d'Adam

でも柔かく、彼は堅すぎる。然しながらあんたがずっと賢い、心に立派な分別が宿っている。だからこそ貴女とお近付きになるのがよいんだ。貴女と話したい。

E. ええ、結構です。

D. 誰にも知らさぬように。

E. 一体誰が知るんですの？

D. アダムにも。

E. 知らせません、私からは。

D. それでは言うから、言うことを聞いて欲しい。(240)我々二人しか此の場にはいない。アダムは向こうだから我々の話は聞こえない。

E. 大きな声で話して下さいな。彼には何も分からぬでしょうから。

D. この庭で貴女のために仕組まれてある大いなるはかりごとを話して上げよう。神が貴女に与えた果実というのはたいして善い所がなく、貴女に厳しく禁じた果実はその中にたいした力を持っている。その中にこそ生命の恩寵と、(250)力と支配と、善と悪の全ての知識の恵みがある。

E. どんな味ですか。

D. 天上の味わいだ。貴女の美しい肢体、美しい顔にこの様な僥倖はふさわしい筈、貴女が全世界の女主人^{あるじ}、天上と地底の女主人となり、存在すべき全ての物事を知り、全てのものの良き主となる、この様な幸運は全くふさわしい。

E. この果物がそのようなものなんですか。

D. そうだ、たしかに。

[そこでエヴァは念入りに禁じられた果実を見る。それを長い間見つめてから言う]:

E. (260)見ているだけでも気持の良いものだわ。

D. それを食べれば貴女はどうなるか。

E. 私が、どうなるか知りません。

D. 私を信じないのかね。では先づそれを取りアダムに与えなさい。直ちに天上の王冠が手には入る。貴方がたは天上の創り主と同等になり、神は彼のはかりごとをあんたたちに隠しだてできなくなる。その果実を食べるや否や心は変わる。あんたたちは間違いなく神と共にあって(270)同様の至善と同様の権能を持つのだ。さあ、その果物を食べてごらん!

E. どうしましょうか。

D. アダムなんぞ信じるな。

E. そうしましょう。

D. 何時食べるかね？

E. 待っていただきたいの、アダムが休息するまで。

Le Jeu d'Adam

D. さあ、食べるのだよ。怖がらずに！　ぐずぐずするのは子供じみている！

[それから悪魔はエヴァを離れ、そして地獄の方へ行く。アダムがエヴァに近付いてくる、彼女が悪魔と話していたので腹を立てながらエヴァに言う]：

妻よ、私に言いなさい。悪いサタンが何を求めたのだ。お前に何を望んでいたのだ。

E. 彼はわたしたちの利益について話しましたの。

A. (280)裏切者など信じてはいけない、あいつは裏切者だよ。よく分かっている。^⑩

E. どうしてですか？

A. 試したんだ。

E. それで彼に逢ってどうなるっていうの。考えを変えさせるんでしょう。

A. そんなことはさせん。あいつを試してみるまでは何も信じないぞ。

奴がお前の側に来るのを決して許すな。全く不実な奴なんだから。且て自分の主を裏切り(290)神の高い位に身を置こうとした。そんなことをした恥知らずがお前の方に逃げてこられては困る。

[その時人工的に作られた蛇が禁断の木の幹にくっついて登る。その木の傍らのエヴァは小さい耳をそれに近付けて恰も蛇の勧言を聞く振りをする。それからエヴァは林檎を受け取り、アダムに手渡す。彼はそれをまだ受け取らない。エヴァがアダムに言う]：

食べてごらんなさい、アダム！　貴方はこれがどの様なものか知らないんです。私たちのために用意されてあるこの素晴らしいものを取りましょう。

A. 本当にそんなに良いものか？

E. お分かりになるわ。でも味わってみなければ分からないでしょう。

A. どうか怪しいなあ。

E. ためらわないで下さいな。

A. いや、そうはしない。

E. ぐずぐずしているなんていやになってしまう。

A. じゃあ、それを貰うよ。

E. さあ、召し上れ。(300) これを食べて善悪を知るようになるのよ、私が先に食べましょう。

A. 私はあとだ。

E. そうね。きっとよ。

[エヴァはそこで林檎を少しかじり、アダムに言う]：

食べましたわ。まあ、何という味でしょう。こんな美味しいもの食べたことがない、この林檎はそんな味なの……

A. どんな味だって？

E. 人が味わったことのないようなもの。私には今とても判然とものが見える。全能の神

Le Jeu d'Adam

のようよ。全てこれまでに有ったこと、又これから有るべきことが(310)私には完全に分かります。私は全てのものの主。アダム、お食べなさい。躊躇せずに、それを取るのが一番よいのよ。

[そこでアダムはエヴァの手から林檎を受け取り言う]:

A. お前を信じよう。お前は私と同じものだから。

E. あがりなさいな、疑ってはいけないわ。

[そこでアダムは林檎を少し食べ始める。それを食べると直ちに自らの罪を悟り、人々に見られぬように身をかがめる。立派な衣服を脱ぎ、無花果の葉でできた貧しい衣をつけて、この上なく悲し相に嘆きの言葉を言い始める]:

ああ、罪人よ、私は何をしたのだ。取り返しはつかず、私は今死んでしまった。救いの望みもなく私は生命を落とした。私の運命は随分ひどい所へ落ちこんだ。私の幸せな状態は不幸に変わった。(320)とても幸福だったのに今や何という惨めさ。私は悪い妻の助言に従って私の創り主に背いた。ああ情けない、罪深い私はどうしよう。我が主をどの様にしてお待ちするのか。自分の愚かさ故におろそかにした主のみ前にどの様にして罷り出られようか。こんな悪い取引きはしたことがない。今、私は何が罪かを知っている。ああ、死よ！何故私を生かしておくのか、(330)私を世界から引き離さぬのか。何故私に尚も世界を穢させる？ 私は地獄の底を味わうべきだ。地獄の中が私の住みかとなろう。私を救うお方がやってくるまで地獄で私は日々を過ごそう。いづこから其処へ私のために助けが来ようか？ いづこから地獄へ、私のために救いがこよう。誰がその苦しみから私を引き離してくれよう。我が主に背いた私に(340)誰一人友となってくれる者はいない。私を地獄から引き出す程の大きな力を持つ人は誰もないだろう。もうどうしようもなく私は破滅だ。我が主に対しこの様な悪事を働いたからには弁明に立つ余地もない。まこと私の過ちで、彼は正しいのだから。ああ神よ！こんなに呪われたひどい状態です。誰が今後私を思い出してくれましょう。栄光ある王に背いたのです。天上の王に対し罪を犯したのですから(350)一言の弁解の言葉もありません。この状態にけりをつけ私を裁きから引き出してくれる友人も隣人もおりません。神が私に等しいものとして与えて下さった私の妻さえ私を裏切った今、私を助けて下さるよう誰に祈ったらよいでしょう。彼女は私に悪い忠告を与えたんです。ああ、エヴァよ！

[そこで自分の妻であるエヴァをつくづくと眺めて言う]:

ああ、心を狂わせた妻よ！お前は不幸にも私から生まれた。(360)こんな不幸な境遇に私を陥れたこのあばら骨は焼かれてしまっておればよかった。こんなひどい騒動を起こしたのだからそのあばら骨は火にくべられて然るべきだった。神はあばら骨を私から取られた時どうしてそれを焼いてしまわず、私を殺しもされなかったのか。脇腹の骨が全身を裏切りそして狂わせ、我が身を虐待した。どう言ったら良いかどうしたら良い

Le Jeu d'Adam

か私には分からない。もし天上の恩寵が下らぬとすれば私は苦しみから免れられない。
(370) 私の心をさいなむのはこの心痛だ。ああ、エヴァよ！ 何という不幸！ お前が
且て私と同じものになった時、何たる重荷を私に背負わせたか。今私はお前の助言のた
めに身を滅ぼし、お前の助言ゆえに不幸となり、大層な高みから下に落とされた。権能
ある神でない限り、この世に生を享けた人の手によってでは其処から引き上げられぬだ
ろう。私は何を言ったのか。ああ、何故神の名を呼んだのか。神は私を助けて下さろう
か？ (380) 私はあの方を怒らせた。マリアより生れる御子のほかには如何なる救いも求
められまい。神に信仰を捧げなかったのだから希望が持てるかどうかは分からない、今
は全て神の思し召しになりますように。我々には死があるのみだ。

[そこでコーラスが始まる：応誦]

その時神は逍遙されていた

コーラスがそう歌うと神は長い衣服を着けて現われる。あたりを見廻しながら天国へとは
入り、ちょうどアダムが何処にいるかを探している様子である。アダムとエヴァは恰も自
分たちの哀れな有様を知っているかのように天国の隅に隠れている。そこで神が言う]：

アダムよ、いづこか。

[その時両人が神の方にむかって立ち現われる。然し完全に直立しているのではなく自らの
罪に対する恥ずかしさから少し身体をかがめ、大変悲しげである。アダムが答えて言う]：

我が主よ、私はここにいます。貴方様のお怒りを怖れて身を隠していました。そして私
が裸であったので(390)こんな工合に隠れていたのです。

F. お前は何をしたのだ。どんな過ちをしたのか。誰がお前を幸せな状態から引き離れた
のか。一体何をしたのだ。何故恥ずかしいのか。

A. どの様に貴方様に話を申し上げてよいのか。

F. これまでお前は自らを辱しめるようなものは何も持っていなかった。今お前は大層悲
しげで憂鬱な顔付をしている。そのようにしているのは何か咎めるところがあるのだな。

A. 貴方様の前で大変恥ずかしい思いをしています。

F. (400) どうしてか。

A. 大きな羞恥が心をごんじがらめにしているので私は貴方様のお顔をみつめる勇気があ
りません。

F. 何故お前は私の禁令を破ったか。それはお前にとって大いに益であったか。汝は私の
しもべである。私は汝の主だ。

A. 貴方様にさからうことはできません。

F. 汝を私の似姿として造った。何故私の命令に背いたか。まさしく、汝を私の姿ど
うりに造り上げた。(410) その故にこのような侮辱を私に与えた。汝は私の禁令を守らず、
故意にそれを破った。お前は果実を味わった。それは私がお前に話しておいた果実であ

り、禁じておいたものだ。食べたことでお前は私と同等になろうと考えたのか。嘲弄する心算だったのか、どうかね。

[そこでアダムは神にむかって手を差し伸べ、そのあとでエヴァを指差し、そして言う]：
貴方様が私に与えられた妻がまず貴方に背くこの罪を犯しました。果物を私にくれました、それを私は食べました。(420) 思いますに、それが害毒になりました。この食べものを不幸にも知りました。私は妻ゆえに悪い事をしたんです。

F. お前は私を信じるより自分の妻を信じ、私の許しなくして果実を食べたのだ。お前に似合う報酬を与える。大地は呪われるであろう。その大地に麦の種を播くとも、それは実をなさぬ。お前の手の下で大地は呪われ(430) 耕作はいたづらに徒労となる。大地はその果実を拒み、いばらやおになべなを成長させる。お前の罪状ゆえに呪われて、お前の播く種を変えてしまうのだ。大いに精出して働き、大いに苦しんでパンを食べなければならぬ。大いなる苦悩を以て、大いに汗を流して、お前は夜も昼も生きることになる。

[そこで神はエヴァの方へ振り向き、恐ろしい顔で次のように言う]：

汝、エヴァよ、悪しき妻よ、(440) お前はいち早く私に反抗を始めた。私のいましめをほとんど守らずに。

E. 悪い蛇が私を騙しました。

F. 蛇の言葉でお前は私と等しくなれると思ったのか。何が起ころるか分かっているのか。汝は生ある全てのものを支配しておったのに。何とこの様に早く汝はその支配権を失ってしまったことだ。私は汝が今悲しみにくれ、不幸になったのを見る。お前は利を得たのか、あるいは失ったのか。(450) 私は汝にふさわしいものを与えよう。お前の奉仕に報いるのだ。全ゆる点でお前の状態は悪くなる。悲しみの中に子供を生み、子供たちはみな苦しんで年月を過ごす。お前の子供たちは悲しみの中に生まれ、苦悩の中に死ぬ。この様な苦難と悲惨をお前とその子孫に味わわせる。汝から生まれ出づる者は(460) 汝の罪を歎き悲しむであろう。

[エヴァは答えて、言う]：

E. 私は罪を犯しました。それは狂気のせいです。たった一個の林檎のために私の子孫を苦難に陥れるという程の大きな災難を受けるのでしょうか。些細な利得のために私は大きな債務を負うのですね。私が悪を行ったとしても、それはたいして不思議じゃありません。人を誘惑する蛇が私を騙したんですから。蛇は悪いことを沢山知っていて小羊とは比ぶべくもありませんわ。蛇に助言を求める者は不幸になります。私は林檎を取りました。(470) 愚かな行為をしたのは存じています。貴方様の禁止にも拘らず、それに対し不誠実な行動をしました。悪を味わい、貴方様から憎まれております。果物を一かじりしたために私は生命を失わねばなりません。

Le Jeu d'Adam

[そこで神は蛇を脅し、そして言う]:

F. 汝、蛇よ、呪われてあれ！ 汝に私の権限を再び行使する。汝は生涯くる日もくる日も腹を地につけて這い回るがよい。森にあってもあるいは平野、荒地にあっても塵埃のみが常に汝の食物となるであろう。女はお前を憎み、(480)お前の危険な隣人となる。お前は女の踵を待ち伏せするであろうが、女はお前の舌をひき裂く、お前が非常な打撃を被ることとなるその様な槌で、女はお前の頭を打つ。また更に、女はどの様にして汝に復讐できるかを熟慮するのだ。お前が女と知り合ったのは運が悪かった。女はお前の頭を下げさせるであろう。さらに、女からその子孫が生まれ(490)彼は汝の力を打ち砕くこととなる。

[そこで神は彼等二人を天国から追放し、そして言う]:

さあ、天国の外へ出て行くのだ。お前達はこの園を愚かにも交換してしまった。お前達は大地に家を建てるのだ。最早天国に留まる理由がない。当然の権利としてもう何も要求できぬのだ。永久にここから立ち去れ、裁きによって、もう何も所有することはできぬ。他の場所で住み家を求めよ。至福の地を離れよ。(500)かくして一週の日一日たりとも飢えと疲労は尽きず、悲歎と苦悩は尽き果てぬ。大地にあつて汝等は幸せ薄き日々を過ごし、その後遂に生命を落とす。死なぬものを味わったあとは息つく暇なく地獄へおもむくのだ。肉体はこの世に追放され、魂は地獄で苦しみを受ける。サタンが汝等を支配し、(510)お前達を助け得る者はいないのだ。もし私がお前達に憐れみをかけねば誰がお前達を救うであろうか。

[コーラスが歌う：応誦

汝の顔に汗宿り

その間に天使が白衣を着て現われる。光り輝く剣を手にしている。その剣を神は天国の門に置き、そして次のように言う]:

天国をしっかりと守護せよ。この追放されし者が決して天国へは入らぬように。この無法者が生命の果実に触れるという権力と権限を二度と持たぬように焔と燃えているこの剣を以て、侵害者に対し充分に天国の道を守れ。

[天国より追放されたので、いかにも悲しそうに困惑して、二人は地面につくほど、踵の上にかがみ込む。神は彼等を片手でさし示し、顔を天国の方へ振り向ける。

コーラスが歌い始める：応誦

見よ、アダムは孤独となりて

それが終ると神は教会の方へ退場。それからアダムは鋤を、エヴァはまぐわを持ち二人は大地を耕し始め、その地に麦を播く。播き終ると仕事に疲れたようにかたわらへ腰を下ろしに行く。弱々しく屢々天国を見上げ、自分の胸を叩く。その間に悪魔がやって来て彼等の耕地にとげのある茨や薊を植え、立ち去る。やがてアダムとエヴァは耕地の方へ来て茨や

Le Jeu d'Adam

鯨が立ち現われたのを見付け、激しい悲しみに打ちのめされて大地にひれ伏す。そしてやおら起き上り自分の胸と太腿を打ちながら絶望の身振りをする。アダムは嘆きの言葉を始める]：

ああ情けない！ みじめなさまよ、人間が崇め奉る主を捨てたという私の罪が私にふりかかった(520)この不幸な時を見ようとは。主が私を救って下さるようと、誰がとりなしてくれようか？

[その場でアダムは天国を振り返り、両手を天国の方へ上げ頭を垂れ、そして言う]：

おお、天国よ、最も美しいすみかよ、緑の木々多き栄光の庭よ、それはお前の眼に何と美しく映ることか。まことに私は己れの罪故に其の場所から放り出された。天国へ戻る希望も全て失ってしまった。私は天国の中にいた、けれども天国を享受するすべを知らなかった。天国から直ちに私を立ち去らせることとなったあの助言を信じた。今や私は悔んでいる、私が腹を立てるのも当然だ。(530)しかし遅すぎる、私の嘆きは何の役にも立たない。私の判断力は何処へ行ったのか。何を考えていたのか。栄光ある王をサタンのために捨てたとは！ 今や私は一生懸命に働くのだが、ほんの少ししか益はない。私の罪は物語に書かれるだろう。

[そこでエヴァにむかって手を上げる、彼女は少し離れたところにいる。アダムは非常に憤慨して頭をふりながら言う]：

ああ、悪い妻よ！ 裏切りに満ちた女よ！ 全くの滅びの道へとお前は直ちに私を誘った。何として私の理性と判断力を失わせたのか。私は今、後悔しているが許しは得られない。哀れなエヴァよ！ 何と悪に引きずり込まれたことか、(540)お前はすぐさま蛇の忠告を信じてしまった。お前ゆえに私は死ぬ、私は生命を失った。お前の罪は書物に記されるのだ。お前には大いなる混乱しるしの徴がみえるか。大地は我々の呪を感じとっている。我々は小麦を播いたが、土地にはおになべなが生じた。様々の罰の始まりだ、悲惨なことだ。然し更に恐ろしい死が我々を待ち受けている。それから地獄へ連れて行かれるだろう。思うに、(550)其処では苦悩にも責告にも欠けることはない。

みじめなエヴァよ！ どう思うかね。お前はそれを手に入れた。それがお前に寡婦資産として与えられたのだ。以後お前は決して男に善きものを提供することはなからう。常に理性の正道には従わぬだろう。我々の家系から生れてくる全ての者はお前の罪の重荷を感じることとなる。お前は悪事を働いた。その罪は全ての人にふりかかる。その罪の苦しみを変え得る人はなかなか現われないのだ。

[そこでエヴァはアダムに答える]：

アダム、御立派な貴方、随分私を侮辱なさったのね。(560)私の悪いところを並べ立てて非難なさった。私が卑劣な行為をしたのなら、私とその咎を受けましょう。私は罪人で、神のお裁きを受けます。私は神に対しても貴方に対しても大変悪いことをしました。

Le Jeu d'Adam

私の悪行はこれからも長い間誹謗されるでしょう。私の罪は重くその罪過に私は恥じ入ります。私は罪人で、善いところは全然ありません。神に対し弁明する余地はありませんし、自分を罪過ある者と認めないわけにはまいりません。お許し下さい。私には償いできませんから。(570)もしできるならば捧げ物によっていたしまししょうに。私は過ちを犯した哀れなみじめな者です。私の背信ゆえ、神に対し恥ずかしくてなりません。死よ、私を捕えておくれ。私の息の根を止めておくれ！ 私は危難に溺れ岸にはたどり着けないのです。邪悪な性質の墮落した蛇が危険な果実を私に食べさせました。私はそれを貴方に上げました。善いことをしていると思ったのです。そして貴方を罪に陥れました。そこから貴方も逃れられないんです。何故私は創り主に従わなかったのでしょうか。(580) どうして私は貴方の言い付けを守らなかったのかしら。貴方は罪を犯しました、けれどもそれは私が原因です。我々の罪の償いは長いことかかりましよう。私の罪咎、私の大きな不幸については、私達の子孫が高価な犠牲を支払うでしょう。罪の果実は甘かったけれども苦しみは厳しいものです。食べたのが悪いのです。叛逆は我々のなしたことです。しかしながら、私の希望は神の御手のうちにあります。この罪科のあがないは高価でありましようが、神は私に恩寵をお与え下さり、顕現遊ばされて、(590)みちからを以て我々を地獄の果てから連れ出して下さいましよう。

[その時、3、4人の悪魔と共に悪魔の頭^{かしら}がやってくる。手に手に鎖と鉄の桎梏を持ってきてそれをアダムとエヴァの首につける。或る者は二人をせかして立て、他の者は彼等を引張って地獄の方へ行く。他の悪魔たちは地獄へ落ちる連中を出迎えに地獄の入口の所までやってくる。二人の破滅を喜びお互いに大騒ぎをしながら。そのうちの悪魔の一人は地獄へ近付くアダムとエヴァを指し、彼等をささえて地獄へ落とす。そうすると地獄は濃い煙をもくもくと出す。悪魔の仲間たちが地獄の中で喜び叫び合う声が大釜や鍋を打ち叩く音に混じって聞こえてくる。ほどなく悪魔たちが舞台に現れて歩き回る。数人の悪魔はそのまま地獄に残っている]。

—アダムとエヴァの楽園喪失の場面おわる—

—跋—

神とアダム、エヴァ、悪魔の語る言葉は、この劇を楽しんで見物した当時の観客の思想や感情をうつし出す鏡でもある。観衆はアダム、エヴァと共に一喜一憂したことだろう。彼等が実感として殊に共鳴したであろうと思える表現を今少し詳しくとり上げてみることにする。まず、アダムについて述べよう。Tu le devez estre ben fiél (12)／お前はエヴァに誠実であれ、と神はアダムに命じた。そしてアダムは理性によって彼女を支配するのである。Tu la governe par raison (21)／されば二人の間には大いなる愛と理解が生まれる。それが結婚の掟である Tel soit la lei de mariage (24)／と神は諭した。これは封建

時代の社会にあっても理想的な結婚の姿であったろう。神に全身全霊を祝福された最初の人間の美しい姿である。アダムは神の園をあづかる *jardenier* (182) 庭番ではあるけれども君主より封土をあづかり受けた臣下のように堂々と威厳に満ちた存在だ。「彼は全ての大地の支配権を持ち」 *De tote terre avez la seignorie* (61) /、公平に判断して、善きもの、悪しきものを選び得る権限 *poësté* (75) は彼の掌中にある。*seignorie* には領主の権利という意味がある。*poësté* は力であるが律法による権限ということだから、まず最初の人間として現われたアダムには、アングロノルマン時代の君主の寵愛を受けている、上流社会に属する領主の風格さえ散見する。観客は身近な社会の理想像であるアダムをみるのである。神が一つの禁令を言い渡すとアダムは答えて、たった一個の果実と引き換えに領地 (107) (封土という意味がある) を失うならば裏切者に対する法 (111) によって裁かれるべきだ、と決然として言い切る。その時代は隙があれば君主を殺して下剋上の世界が繰り広げられた社会であった。この様な社会にあっては、ひとたび裏切行為が勃発すると社会秩序は混乱の極みに達し、君主の地位も危うくなる。裏切者 *traïtor* (111) とは最もいむべき破廉恥な罪人の代名詞であったのだ。アダムは、若し神に背くような場合は最も破廉恥な罪人として裁かれるべし、と自らの覚悟を雄々しく述べる。彼は誠実な男で、神には忠実に誠を示そうと精一杯の努力をする。然し自分こそ絶対に神に背かない、というこの自負こそ人間の弱さを覆い隠そうとするアイロニーである。覧る人は彼等の始祖アダムの言葉に人間が自らを陥れる畏の危険性を感じとり、身边にある周囲の状況とひき較べて心を動かされたことであろう。

アダムが豪語した直後に悪魔が何気なくアダムに近寄ってくるのも全く巧みな演出と言わねばならない。それはまるで近所の悪友がふらりとやってきて、不埒なことをしでかそうと誘いかける如く何処にでもありそうな会話だ。一たん諦めかけた悪魔が思い直して、再びつくり笑いをしながらアダムの前に現れるのもたいへん人間臭い。このような悪友の姿は身分の上下を問わず万人の近くにいたはずだ。ドラマにおけるアダムとエヴァの神秘的な世界は、時を越え空間を越えて親しく実感を分かち合える現実感の溢れた世界である。アダムは悪魔の言葉に多少興味を示すのであるが最後には怒って怒鳴りつける。お前は裏切者で真心のない奴だ (204) 二度と現われるな、と悪魔を退散させ、彼はまず最初の誘惑を神に誠実な男として切り抜けた。しかしほっと安心する間もなく、アダムは蛇に誘惑されたエヴァに勧められて林檎をかちり、罪に陥るのであった。さて誘惑に負け、罪を自覚したアダムの嘆きようはまるで社会的特権を剥奪されて裁きの庭に立たされた、頼りない裸の人間の有様である。立派であったアダムは姿を消した。生活の規範を法におき、商業取引にも腕を揮ったアングロノルマン時代の人びとの考え方が再びアダムの言葉に現われる。アダムは言うのである……たった一個の林檎と安住のすみかを取り替えるなどという (cf. 107—112) 「こんな悪い取引はしたことがない」 *Unches ne fis tant mal marchié*

(327)／と、そして悲歎にくれる。この大罪の苦悩から自分を救い出し得るほどの大きな力を持つ人（即ち辨護人）は誰もいない、このように大それた悪事であるから自分は神に対し何も言い立てる *entrer en plait*(344) ことができない。誰がこの裁き *plait*(352) から私を救ってくれるだろうか。一躍栄光の座から身を墜落させたアダムを観衆は自分たちの生活の一場面である法廷に引きずり出したのだ。アダムはそこで更に情けない姿をさらけ出す。嘲笑を買うほどの弱々しい一面を見せるのである。特権を楽しみ、自信に満ちていた彼が一たび悲惨な境遇に陥ると女々しく泣きごとを述べる。この落差の激しさはまことに哀しい人間の姿として眼前に迫る。彼は罪を妻のエヴァの所為にしてくどくどと繰り返す言をのべたて、まさにアウエルバッハの言うごとくフランスの百姓か町人か¹²のように非常に動揺して妻を責め立てる。エヴァに対し、地獄の苦しみを手に入れたお前には地獄が寡婦資産 *duaire* (552) として与えられたと厭味を言う。*duaire* (= *douaire*) などという言葉も当時の人びとは聞き慣れていた言葉であったのだろう。エヴァが語る嘆きの中にも債務 *traüage*(464) (= *treuage*) というような言葉が現われ、それは封建時代、君主と臣下の関係の賦課租を思わせる。

さてそれではこのアングロノルマン時代の最も古い劇、現存する写本にはじめて姿を現わす女性、エヴァは果してどのような女性なのか。彼女は優美でやさしい。薔薇よりも瑞々しく、肌は透き通り、谷間の氷上に降る雪よりも白く(227—230)美しい。そして終始魅力的である。神に対してもアダムに対しても、また、悪魔に対しても素直に心を開いて語る。彼女は罪がどのようなものを明瞭に理解していない、軽はずみなところもある可愛い女である。貴女はアダムよりずっと賢いんだからなどと言うお世辞に弱く、好奇心が強い。常に夫に従い、彼の言うことを守るように(35—36)と神の命じた掟を一時は忘れたかの如く、甘美な果物を齧ってしまい、夫も食べるようにと執拗に勧めた。しかし明るくて大らかなエヴァは、アダムと較べても人間として遜色がないどころか美しい心を持ち合わせている。彼女は憎めない。この劇の作者はまことに魅力溢れる素晴らしい女性を文学に登場させたのだ。うっかり蛇の甘言に乗ったエヴァではあったが、一たび罪の重さを自覚した彼女は大変いさぎよい。自らの罪をくどくどと人のせいにしてたりせず、自己の罪を潔く神とアダムに詫びるのである。イギリス中世聖史劇、コーパス・クリスティ祝祭劇とよばれるサイクル劇に登場するエバの姿を垣間みても、例へばチェスターの「天地創造とアダムとエバ」においても、ヨークの「アダムとエバの創造」においても、この初期のアングロノルマン「アダム劇」に登場するエバほどの魅力を持ち合わせない。チェスター劇¹³にあっては、エバは「美味しいものが好きだから」*For women are full liccorie* 219／まず悪魔の誘いに惹かれる、そして神のように賢くなれると言われて木の実の味を試すのである。ヨーク劇では蛇を装った *Satan* が、友達だよと名乗ってエバに近付き、この果実を食べれば善悪を知るようになり、神の如く賢明になり、あがめられるのだと唆す。エバは唆

Le Jeu d'Adam

され、その気になってアダムを説得してしまうのだ。然し神に詰問されるとエバは両劇とも自らの罪を蛇の所為だと言いつてるのみであった。

「アダム劇」のエヴァの言葉は率直である。自分が卑劣な行為をしたのならその咎を受け、神の裁きを受けようと飾り気のない誠実さを溢れさせ、「神と貴方に対し大変悪いことをしました」*Je suis vers. Deu e vers toi mult mesfeite*(563)／「お許し下さい、償いがないのです」*Pardonez le moi, kar ne puis faire amende*(569)／「貴方は罪を犯したけれどもそれは私が原因です」*Tu mesfesis, més jo sui la racine*(581)／と、罪の責任を充分に自覚するのだ。軽卒で可愛い女であったエヴァは自らの苦悩を通して他の人の苦痛も思い遣ることのできる人間に成長する。自分の罪のために苦しみを受ける子孫にも思いを馳せて心を痛めるのであるけれども、罪を悔いた彼女は希望を捨てなかった。これこそ信仰である。彼女は救いの道の光を見出すのだ。

Deus me rendra sa grace a sa mustrance ; /Gieter nus voldra d'emfer par pussance (589—590)／「神は私に恩寵をお与え下さり、顕現遊ばされて、御ちからを以て私たちを地獄から連れ出して下さいましょう」というエヴァの敬虔な祈りの言葉を終幕に観衆は心を引き締める。改めて彼等は原罪を想い、神の慈悲を想うたであろう。「アダム劇」は当時の人びとにとって身近に感じられる親しみ深いドラマであると同時に崇高なる感動を観衆の心に蘇らせ、時空を超えた永遠の神秘の世界へといぎなう深い魅力を湛えているのである。

注

- ① cf. E. K. Chambers, *The Mediaeval Stage*, Oxford, 1903, vol. ii. p. 308.
- ② 「アダム劇」は *Le Jeu d'Adam*, 又は *Le Mystère d'Adam* と呼ばれる。Willem Noomen は CFMA 叢書所収の edition 1971年に *Le Jeu d'Adam* と題した。‘mystère’ という語が14世紀以前には使われていなかったというが Noomen の主張である (see “*Le Jeu d'Adam. Étude descriptive et analytique,*” *Romania* 89, p. 145). TLF 叢書所収「アダム劇」1963年の編者 Paul Aebischer は *Le Mystère d'Adam (Ordo Representacionis Ade)* と題している。
- ③ Paul Studer ed. *Le Mystère d'Adam, An Anglo-Norman Drama of the Twelfth Century*, Manchester University Press, 1918 (rep. 1967) pp. xix—xxiv. Noomen, *op. cit.* pp. 145—163.
但しこの劇が従来 of 典礼劇と同じく教会の祝祭日と緊密な関係をもって演じられたかどうかは不確定である。
- ④ see Studer, *op. cit.* p. xvii., p. xxii.
- ⑤ P. Aebischer, *op. cit.* はこの写本がプロヴァンスで書かれたとしている p. 15.
- ⑥ Old Eaglih *Genesis* の悪魔は自ら神の使いでアダムの所へ現れたと称する。悪魔の誘いを退けるアダムは理路整然と答え、威厳がある。神は美しいエヴァにはアダムに少々劣る弱々しい心を授けられた。God had assigned her a weaker mind という表現は繰返して二度現われる。神の使いを拒絶すれば神を怒らせることになることとひたすら怖れて林檎を口にするとエヴァは哀れで美しく、同情をそそる姿である。(—hæfde hire wacran hyge/Meotod zemeareod—590).
- ⑦ Studer, p. lvi., Willem Noomen ed. *Le Jeu d'Adam*, CFMA 1971, p. 7.
- ⑧ アダムとエヴァの物語に続くカインとアベルの話 603—604行。

Le Jeu d'Adam

- ⑨ Erich Auerbach, *Mimesis*, translated by W. R. Trask, Princeton University Press 1974, p. 151.
- ⑩ Il est plus dors que n'est emfers 223) / 地獄 emfers の綴にはアングロノルマンの特徴の唇歯音の前のmが現われているのである。奥田宏子「中世英国の聖書劇」研究社選書, 33. において魅力的に紹介されている「アダム劇」ではこの個所が「全く、火よりも堅いんだから」と訳されている。
- ⑪ 写本には話者の頭に概ね F. A. E. D. の表示があるのだがちょうどこの個所には混乱がみられる。Aebischer と Noomen 版には対話をするアダムとエヴァのせりふ配分のちがいはない。Auerbach は自己の異った読みを主張する (*Mimesis* pp. 143—151). Studer は Auerbach と 1 個所異っている。翻訳は Aebischer 版を底本としているのであるが、この280—287行は Auerbach の読みに従った。Aebischer, Noomen の対話ではエヴァの言葉があまりにもその場かぎりの言い逃れになるのである。
- ⑫ cf. *Mimesis*, p. 147, p. 151.
- ⑬ Peter Happé ed. “The Creation, and Adam and Eve,” *English Mystery Plays*, Penguin Books, 1975, p. 70.
- ⑭ A. C. Cawley ed. “The Fall of Man,” *Everyman and Medieval Miracle Plays*, London, 1967, pp. 21—24.